

銅賞

相手の気持ちになって考える

横須賀市立武山中学校二年

高田 春歌

私が小学校四年生の時、転校生がやって来た。彼女は父親がアメリカ人で、家では全て英語で会話していた。そのため、日本語がほとんど話せなかった。

初めは、「これはここに置くんだよ」とか、説明する事しかできなかった。でも休み時間に一緒に遊べば、言葉がなくても少し仲良くなれた気がした。そうしてだんだん、彼女はクラスになじんでいった。

しかし、ある事に私は困り始めた。それは毎回授業の間の休みに彼女がどんな事も必ず許可を求めてくる事だった。前の時間に聞いた事も何度も聞いてくる。それが毎日続き、だんだん対応するのが嫌になっていった。

ある日、少し冷たくあしらってしまった。「いいってば、前の時間にも言ったじゃん。」彼女はあまり気にしなかったのか、いつも通りに席へ戻っていった。「やっと言えた」。何だかほっとした。でも、

その授業はほぼ集中できなかった。正直に言ったけれど、平気そうに見えるけれど、本当は彼女は傷ついたのではないか。私に対して、言葉にできないだけで何か複雑な気持ちを抱いているんじゃないか。怖かった。

その時、ふと頭の中に浮かんだのは授業で音読をする彼女の姿だった。彼女は音読がとても苦手だった。声は本当に耳を澄まさないで聞こえない。漢字も分からないから、周りの人から教わりながらゆっくりでしか読めなかった。「もし自分が、彼女だったら」。

読み方も意味も分からない文を三十人以上の前で読めるだろうか。授業が終わっても、言葉が分からないのは自分一人。本心を説明するのさえままならない。そんな場所に毎日来れるだろうか。そこでやっとできた友達にまで冷たくされたら・・・。

次の休み時間、またいつものように彼女はやって来た。私もいつものようにそれに応えた。「はるか、ありがとう」。そう言って彼女は席へ戻っていった。きっと本当に許可がとりたくて来ているのではないのだろう。この空間で私の事を信頼してくれているからこそ、毎日ここへ来るんだ。彼女が席に着くのを見て、そう思えた。

次の年も、その次の年も、私と彼女は同じクラスだった。でも彼

女はだんだん私に許可をとりに来なくなった。前よりもたくさん話すようになり、英語と日本語を交えてとったノートを見せてくれるようになった。そんな彼女を見る度、何だか自分も嬉しくなった。音読はまだまだ難しいようだった。それを見てバカにしたり、傷つくような事を言う人もいた。そんな時、そういう人達と同じにならずに「私達だって外国に行ったらああなるじゃないか」と言えるようになった。そうやって自分自身が成長できたのは、彼女のおかげだ。

中学に入ってから是一緒に帰るようになり部活もクラスも同じだった。下校の時間は時に泣いたり時に笑ったり、互いに成長し合える場だ。彼女が日本語で冗談を言ったり、小学校の時言えなかった本音を話してくれる時は、少し感動する。そして私がいつも尊敬するのは「相手にとっても感情移入する」事だ。私が辛かった事を相談すれば、泣き出す事まである。もちろん嬉しかった事は自分の事のように喜んでくれる。やっぱり、「相手の気持ちになる」のが上手で、それを大切にしているのだと思う。私が彼女に教わった、とても大事なものだ。

一年生最後の日、私に手紙をくれた。もちろん全て英語だった。「何

て書てあるの?」「いつも本当にありがとう。あなたがいなかったら私はどうすればいいか何も分からなかった。私を助けてくれて、本当にありがとう、とかそういう意味。」彼女はごまかすように笑った。思わず涙が出そうになった。私はそこまですごい事をした訳じゃない。むしろ、彼女に学んだ事の方が多い。何より冷たくしてしまつた事だつてあるのに……。せめてこれから、「相手の気持ちになつて考える」事を忘れずに、そして彼女にとって最高の友達でいたいと思つた。来年の彼女の誕生日。今度は私が今までの感謝を伝える番だ。